

■ キレンゲショウマ

Kirengeshoma palmata

(平成19年9月7日指定)

徳島県における指定状況：絶滅危惧Ⅰ類
環境省における指定状況：絶滅危惧Ⅱ類
その他の指定：該当なし



キレンゲショウマ

種の概要

1) 特徴

紀伊半島、四国、九州の深山の湿った岩上や岩礫地にまれに生える多年生草本。茎は高さ0.8-1.2mで無毛。葉は対生し、長さ幅とも10-20cm。円心形で先がとがり基部は心臓形。縁は掌状に浅裂し裂片は三角形で先が尖り、表裏ともに伏毛がある。葉柄は下部では長いが上部では短くなる。7-8月に茎上部の包の腋から円錐形の集散花序を出し、3個ずつ黄色の釣鐘形の花を開く。がくは半球形で先に浅い三角形の5歯がある。花弁は5枚、長楕円形で先がやや尖り長さ2-3cm、肉厚で基部は螺旋状に並ぶ。雄しべは15本。花柱は3-4本で角状、長さ約2cm。さく果は広卵形で、長さ1.5-2cm。下部は宿存する萼に覆われている。熟すと3裂し、多数の種子を出す。

2) 生育環境

冷温帯の陰湿な岩礫地で有機質に富んだやや湿り気のある土壤に生育する。

県内では深山の落葉広葉樹林帯の林下に生育している。

3) 繁殖生態

種子によって繁殖する。人為的には株分けでも繁殖する。

4) 分布

本州（奈良県・広島県）、四国（徳島県・高知県・愛媛県）、九州（熊本県・宮崎県・大分県）に分布する。

県内における生育地は一カ所である。

生育地と生育状況

1998年以前は、剣山行場周辺の湿った岩上や岩礫地、急斜面のガレ場などに大小の群落が多く見られた。この植物は、短く肥厚した根茎で増えるので、群生する性質がある。

かつて、たくさん生育していたキレンゲショウマも、

現在はヒトとニホンジカの影響により非常に少なくなった。県内で生育が確認されているのは、剣山の行場付近の限られた場所のみである。

絶滅要因

1) 人的被害

宮尾登美子の「天涯の華」発表(1998年)以来、開花時期にはキレンゲショウマの花を見に来る県内外の人が絶えない。群落内に足を踏み入れ、踏み倒しや手折るなどしながら花を撮影している。また、花茎を採取したり、盗掘などによる被害が激増した。

2) 野生草食獣

主にニホンジカによる食害が目立つ。ニホンジカはキレンゲショウマを好み、群落内の幼植物から成体の葉や茎、花に至るまで植物体の地上部を根元まで徹底的に食い尽くし、一時は壊滅状態になっていた。

3) 生育地の土壤環境

ニホンジカの細い足で表土や礫は踏み崩され、キレンゲショウマの根元や芽生えも踏み荒らされ、土壤の物理的環境が破壊され、回復するための環境条件が悪化している。

保護対策

1) 人的被害

キレンゲショウマ群落内を通る登山道の両側にロープを張り、群落内に踏み込めないようにする。さらに巡視を強化し、採集・盗掘・群落内での写真撮影者などに注意を促すと共に、保全意識の高揚を図るなどの対策が必要である。

2) 野生草食獣

キレンゲショウマを好むニホンジカに対しては、群落

の周りに防鹿ネットを設置し、群落内に入れないような対策を講じる。防鹿ネットにより回復の兆しが見られている。

3) 土壌環境

ニホンジカに踏み荒らされた土壌環境を人為的に早急に復元することは不可能である。踏みつけをなくし、自

然の回復力に期待する。

4) 結果と今後の予想

ニホンジカに対する防鹿ネットの設置が、食害によってキレンゲショウマが壊滅に至る前に実施できたので、キレンゲショウマは思っていたより早く回復しつつある。自然を守る適切な対策は、早ければ早いほど効果的である。
(森本康滋)



キレンゲショウマの保護柵